編集後記

放課後、休日、野山、神社の森、川べりを駆け廻る子どもたちの姿を見かけなくなったことにお気付きだと思います。

子どもたちはいったいどこへ行ったのでしょうか。

子どもが人間らしく発達していく過程で、自分の体と頭を使って自然に働きかけ、自然を体を通して認識し、集団の行動を通して連帯の心や友情をはぐくみ、集団のルールを作り上げていく――そんな姿が見えなくなってしまいました。

オオバコの葉柄をひっかけ合い切り合いをする遊びを通して、道端に生え人にふみつけられふみつけられても強靱に生きつづける植物の生きざまを体験を通して認識していく子どもたちの姿――私たちは子どもが育つイメージをいつもそのように考えてきました。

しかし今は全くといってよい程さま変わりしてしまったようです。

小学校四年以上ともなれば、競争主義・勝利至上主義の学校課外体育で、早期練習に始まって夕刻五時六時頃まで練習が続けられていきます。研究所が行ったアンケート調査では、現状を危惧する意見が圧倒的に多くありました。

課外体育問題が、学校現場（特に小中学校）の緊急課題だという認識はあっても、それについての系統的・組織的的な実践が不足しているように思われます。

今回は「放課後の子ども」特集として正面からこの問題を採り上げることにしました。

とりわけ巻頭の「円田論文」は熟読検討してもらいたいと思っています。

学閥研究会の『新潟県教育界における「学閥」問題』は第三回になりますが大きな反響を呼んでいます。過去に於てもこれを解明しようとする動きはありましたが、尻つぼみで終わってきました。この研究は豊富な資料と正確な調査に基づく研究として画期的なものです。これからの連載にご期待ください。

次に、前号で予告しておきました「自伝小説（第一回）長崎明」は、原稿はいただいてあるのですが、スペースの都合上次号からの連載といたしますのでご了承ください。

最後に発行の遅れについてでありますが、その大きな理由は編集部の不手際にありますけれども、加えて、執筆をお引き受けくださった方の期限までの寄稿が守られないこともあります。

前号の予告では秋季号第十二号の発行は九月となっていましたが、十一月発行と大幅に遅れてしまいました。十三号からなんとか発行期限の底上げをしながら正規の軌道にのせていきたいと考えていますのでご協力をお願いする次第です。

（小熊　隆）